

山の遭難事故減少へ

今朝(9月7日)の新聞「この人」の欄に青山千彰さんが紹介されていた。「山の遭難事故減少へ原因を分析」している方だ。同記事によると昨年の国内の遭難者数は3,000人超で、半数が60歳以上。青山さんは、「大半の事故は危険と思われる急傾斜や氷結道でなく、一般的な登山道で起こる。油断せずに登山計画を周りに伝え、緊急グッズも携帯して」と指摘している。この言は目新しいものではなく、登山界のリーダーの誰もが、まったく同じ発言をしている。

「事故の大半は一般的な登山道で起こる」

急傾斜や氷結道を通過するときはだれもが緊張して、初心者であっても初心者なりに注意深くゆっくり歩を進める。従って事故が起こることはまずない。初心者が自身の技術では通過できない難場に直面したときは、その場で動かずサポートの手が差し伸べられるのをじっと待てばいい。

緊張して注意深く行動すれば、事故を招来するはずはない。悪場を通過して緊張が緩んだとき、うっかりミスが事故を引き起こす。うっかり乗った玉砂利が石車になって転倒、うっかりつかんだ木の枝が折れる、赤土の斜面にうっかりカカトから着地してスリップダウン。トラブルの招因は、すべからくうっかりミスだ。悪場を抜けても緊張を持続できていれば、うっかりミスを犯すはずはない。しかし、緊張を持続させるのは難しい。悪場を抜けてほっと一息、あーこれだ大丈夫などと気を緩めてしまうのは初心者の証拠である。遭難者の半数が60歳以上とあるが、加齢に従って緊張感を持続するのは難しくなっていくようだ。どうしたらいいか。緊張感を持続させるには、「声を出す」ことである。悪場を抜けてほっとしたらずぐに、「緊張」と自らに声をかけること。パーティ全員でお互いに声を掛け合うことが有効である。

「油断せずに登山計画を周りに伝える」

登山とは、非日常の世界をプレイグラウンドにしているのだから、「油断せず」というのは自明のこと。「登山計画を周りに伝える」ためには、その登山計画を自分なりに把握できていなければならない。いつ、だれと、どんな山に登るのか。それが把握できていれば、楽勝気分に乗れるだろうし、ちょっと厳しいけど面白そうと思えるかもしれないし、このメンバーじゃ無理と判断して計画中止を進言できるかもしれない。

孫子の兵法ではないが、「山を知り己を知らば、百山するも危うからず」である。登山計画書の作成、内容の把握は「山を知り己を知る」ことである。登山計画の作成は、安心安全に登山するための第一歩といえる。登山計画書の作成、把握は山の遭難事故減少に直結するはず。であるにも関わらず、登山計画書も提出しないまま登山する人のなんと多いことか。登山計画書を作成、提出できる自立した登山者の育成こそが、現在の登山界に求められている大きな課題である。